

杉 の 子

奥多摩町立氷川小学校
学校便り 6月号
令和5年 5月31日発行

子どもの成長のためにできること

副校長 野尻 迅人

本校に赴任して4年目を迎えました。3年前と一緒に氷川小学校の一員になった当時の新入生たちは、今年度4年生になりました。2年生は5年生に、3年生は最高学年になり、あの頃低学年だった子どもたちは、全員高学年になりました。

副校長になることで、子どもたちとの間に距離ができることに一抹の寂しさを感じていたのですが、本校の子どもたちは優しく、副校長にも気軽に声を掛けてくれます。おかげで子どもたちの様子もよく分かるので、3年間でどのように成長したのかについても把握することができます。縦割り班活動などの場で活躍している様子を見ると、幼かったあの子たちが随分と逞しくなったなど、感心させられます。その一方で、思春期に差し掛かったことから生じる体と心の変化をもて余して、戸惑う様子も見られます。

思春期に差し掛かると、子どもは自分自身の人格を確立し始めて、近くの大人から離れようとする傾向があります。自立を図ろうとする一方で、自分自身のことが分かるようになってくことから、苦手意識が大きくなる頃でもあります。この頃の子どもは、自分の力で物事を何とかしたいと思いながらも、思うようにできない自分とのギャップに不安感を抱いています。

この時期の子どもにとって大切なことは、自分は自らの力でできるのだと感じられることではないでしょうか。

「できる」と実感できる場面は、「自分の力でやった」と思えることが前提になります。本校では、子どもが自分自身の力で挑戦することを、積極的に奨励しています。各教科の学習や行事の場において、少し難しそうと思えることに勇気を出して挑むことができよう教育活動を展開しています。例えば、学習課題を提示した後、その課題の解決の仕方は子どもに考えさせたり選択させたりしています。大きな学校行事の企画立案・運営を全て教職員が執り行わず、子どもの実行委員会を立ち上げ、実行委員会にも企画立案・運営を任せています。最近では、前例踏襲になりがちな縦割り班活動において、新しい企画を立て、それを実行することを積極的に進めています。失敗もついて回りますが、成長のためのよい糧となります。

私は、子どものそばにいる大人にできることは、子どもの力を信じ、温かく見守ることだと考えています。本校の教員にも、子どもからの要請がない限りは、極力手を貸したり答えを教えたりせずに、子ども自身の力でやっていることを見守り励ますことを指示しています。そして、その取り組んでいる過程を評価し、勇気付けることに重きを置いて指導するよう全校で徹底を図っています。教師は英語で「teacher」ですが、最近では「teach（教える）」だけではなく、「coach（導く）」という視点での指導も大切だと言われています。学習の主体者である子どもを中心とした考え方ですね。

依然として未来は予測困難です。大人ですら不安を感じる社会に、子どもたちが自信をもって踏み出していけるようにすることが、子どもの近くにいる私たちに課せられている責任なのではないでしょうか。主役はあくまで子どもです。私たち大人は、子どもの主体的な行動を引き出し、励まし、時には一緒になって考えて、主役の活躍と成長を引き立てることが求められています。子どもが健全に思春期を乗り越え、将来自分一人の力で生きていくことができるよう、見守り励ますことを大切にしていきたいものです。